



梅のうゑ



松二も一り一く一は一世一の中一ハ一く一く一落一ル一

る一く一や一わ一ら一き一う一 是吉甲斐國才延

山一より一出一る一僧一に一く一ら一前一縁一れ一前一生一

と一海一を一き一し一と一多一し一年一乃一と一ミ一あ一ら一ん一

渚一よ一め一の一こ一の一た一ら一廻一國一子一赴一作一

い一は一く一み一も一恒一ハ一果一海一の一水一の一く一

え一ら一ま一て一ち一く一ぬ一様一の一を一月一日一渚一が一く一

乃行上

乃行上

いづり来て所をさるる世にやふ
我衣手やもたれ江表望しむらく
君にこそよくこれいさむけの國

伯耆よほつてくちりてや村雨を

さういそむる菴子宿をうらやと

おひとゞには屋のしうへ葉内やふ

宮や松尾草壁の宿よがよふとんを

まゝ木のうつゝな人もなく心も
すりな折筋にこといふ人の飯部賢

是ハ玉縁のゆりさる一夜の宿とは

あくと 宮にお家れは中一夜お利

益おもしろけれをさあつゝあさく

新れ果すにふのこや若りあせくや

何じは身よこつゝるる

詞

シテサレシ

白手まきん

内きりよせく降る雨は
方る一町吉とく反り竹へ
五より日もま竹の一本所明
臨へとて子くぬへとり露れ
藤乃宿さうまたくを袖とて
河とさうありや極人西か
とこくやぐく東南は来るるのり

早くも降るに月ふらりと
雨る吉の松吹掃き心
夏よさうぬすまよく

甲子
よ尸へ起事れし行るは

是はあつた太鼓印く蘇の衣裳
のい不審よこころ
ト是は人乃形見に

まねつれ心うへうふもきり世活

の切らるといふ事あるしす

相争行とく此物語ふうまの系色

うらぐ儀とるしうまうやるふ

いほきも女ハおひふし一対に慈慕

のぢみふし況心とるとりあしれと

河原とくしをうらも不審る跡も也

道の太鼓りしこれうぬ愛うぬ物

終ふ際五ハ昔ハ成格けとも太鼓

を朽を若しして鳥おとるうぬ

この法代子もをもういるふ池水

のづくりしう年と海し物と又友

うら概心をだまけ終くと云きや

うらきすしうくに失うきり
まゆ法

